平成 31 年度大島賞・CSA 選考結果報告

褒賞選考部会
委員長 猪阪善隆

大島賞は、若手研究者を対象に、将来、本邦の腎臓学研究のリーダーたりうる人材を顕彰することを目的に設けられている。第 26 回 令和元年度の大島賞選考部会は平成 30 年 10 月 14 日に行われた。今年度は 5 名の候補者の推薦があった。褒章選考部会では、候補者の研究業績の質と広がり、および将来性などについて多岐にわたる熟議が行われ、以下の 2 名を大島賞に値するものとして理事会に推薦し、平成 30 年 11 月 25 日承認された。

大島賞

中野大介氏 香川大学

研究主題「生体イメージングを活用した腎病態生理機構の解明」

中野氏は大阪薬科大学卒業後、同大学院において学位取得後、米国ジョージア医科大学で腎循環に関する研究を開始し、腎髄質血流と尿細管電解質調節に関する作用機序を明らかにした。その後、香川大学薬理学講座で研究を行っていたが、再度米国に留学し生体イメージング技術を身につけ、急性腎障害における乏尿のメカニズムや近位尿細管における糖の取り込みメカニズムの解明などを報告するとともに、生体イメージング技術を用いて共同研究を行い、国内での腎病態生理研究の推進に貢献してきた。

以上のように中野氏は生体イメージングを用いた腎循環に関する基礎研究により優れた研究成果を出しており、今後の発展性も含めて大島賞に値すると評価された。

涌井広道氏 横浜市立大学

研究主題「高血圧・高血圧関連心血管腎臓病におけるアンジオテンシン受容体結合因子の病態生理学的意義の解明」

涌井氏は、横浜市立大学を卒業後、臨床研修を行った後、同大学院に進学し、アンジオテンシン受容体結合因子 ATRAP の高血圧関連腎臓病における機能的意義の研究を開始した。大学院の時代には、それまでの *in vitro* で得られていた知見を発展させて、生体レベルでの病態生理学的意義を明らかとした。大学院を修了後も ATRAP の意義を研究し、ATRAP が定常状態では作用しないが、病的刺激に対してはアンジオテンシン受容体の過剰活性化を選択的に抑制することを明らかとした。また、ATRAP が組織レニン-アンジオテンシン系の活性化の指標となることも明らかとしている。

以上のように涌井氏は高血圧に関連した腎臓病に関わる ATRAP の病態生理学的意義の解明を行っており、将来の腎臓学研究のリーダーたりうる若手研究者として大島賞に値すると評価された。

CSA

CSA (Clinical Scientist Award) は、本邦の腎臓学における臨床研究のリーダーたりうる中堅研究者を顕彰することを目的に、昨年度より新たに設けられた。第3回 令和元年度の CSA 選考部会は平成 30 年 10 月 14 日に行われた。今年度は 5 名の候補者の推薦があった。褒章選考部会では、臨床研究について、手法の如何を問わず、結果として疾病、病態の診断、予後、治療等に直接的に結びつく研究と定義した上で、この定義に沿った研究成果とその継続性に着目して多岐にわたる熟議を行い、以下の 2 名を CSA に値するものとして理事会に推薦し、平成 30 年 11 月 25 日承認された。

諏訪部達也氏 虎の門病院

研究主題「常染色体優性多発性嚢胞腎 (ADPKD) 患者の治療及び病態の解明」

諏訪部氏は、名古屋市立大学卒業後、武蔵野赤十字病院、虎の門病院での研修を経たのち、虎の門病院で研修指導医として若手の教育を行う傍ら、多くの臨床経験、特に ADPKD 患者の治療にあたってきた。その診療経験のなかで、数多くの腎動脈塞栓術や嚢胞感染に対する治療を行い、その診療経験に基づいた臨床研究を報告している。TAE に関する報告は、ADPKD 患者に対する TAE 治療の適応や時期を検討するうえで非常に有用である。また、ADPKD 患者の副作用として重篤な嚢胞感染の治療においても、諏訪部氏の報告は非常に有益な情報をもたらしている。また、Mayo Clinic に留学し、ADPKD, ADPLD の疫学研究を行い、成果を発表するとともに、Translational Research の修士号を取得している。

以上のように諏訪部氏の業績は ADPKD 患者の臨床・研究に大きく貢献し、また Translational Research の専門家として今後も活躍が期待できる存在であることから、CSA に値するものと評価された。

山内真之氏 虎の門病院

研究主題「臨床・病理・バイオマーカーを用いた糖尿病性腎症の病態解析」

山内氏は、京都大学農学部・京都府立医科大学を卒業後、国立国際医療センターなどで研修を経たのち、虎の門病院腎センターで勤務しつつ、糖尿病性腎症の臨床研究を行い、腎生検で確認された糖尿病性腎症のコホートを用いて腎病理所見の臨床的意義に関する新たな知見を報告した。そしてハーバード大学で疫学の学位を取得するとともに、ハーバード大学ジョスリン糖尿病センターで糖尿病性腎症進展に関与するバイオマーカーの研究を行った。帰国後も AMED 研究「糖尿病性腎症の進展予防に向けた病理分類-病理-バイオマーカーを統合した診断法の開発」で臨床・病理・バイオマーカーを組み合わせた臨床研究について報告している。

以上のように山内氏は「糖尿病性腎症」におけるクリニッシャンサイエンティストとして我が国のリーダーの一人であり、今後のさらなる発展が期待できることから CSA に値するものと評価された。